

敦煌写本 — P. tib. 1257 — に見られる 経論リストについて

赤 松 孝 章

I. 敦煌チベット文献 P. tib. 1257 は、10ページから成る冊子形の写本である¹⁾。はじめの3ページには、仏教經典・論書合わせて85部のタイトルを、チベット語と漢文で併記、列挙しており、後半の7ページは、約570語に及ぶ仏教用語のチベット語と漢文とによる語彙集、グロッサリーとなっている。この後半の語彙集の部分については、近年、袴谷憲昭氏と木村隆徳氏とによる詳しい研究論文が発表されたし²⁾、他にも数人の研究者が P. tib. 1257 に注目していたけれども、前半部分の経にリストについては、未だ明らかにされていない。

かつて、われわれは、P. tib. 758 が、鳩摩羅什訳『阿弥陀經』からの重訳本の写本断片である、ということを報告した³⁾。そして、P. tib. 758 の尾題には、“*sNang ha mtha' yas kyi mdo*” とあり、チベット大蔵經に入蔵されている訳本のタイトル “*bDe ba can gyi bkod pa*” (北京版, No. 783) とは異なっており。今の P. tib. 1257 の中に同じ経題が存在している、ということを指摘しておいたのである。その際、他の経論のいくつかのタイトルも、現存蔵經本のそれと相違していること、また、チベット訳は現存しないとされている経論のチベット語タイトルが P. tib. 1257 に認められることの2点において注意を留めていたところである。

チベットにおける仏典翻訳の初期の実情に関しては、まだまだ明確にされていない分野であるが、敦煌チベット文献を資料に加えることが可能になって以来、徐々に、その端緒がつかめてきたように思われる。そうした意味において、P. tib. 1257 の経論リストの性格を明らかにしておくことは、チベットの初期翻訳事業を解明していく上でも、また今後、敦煌チベット文献の研究を進めていく上でも、必要な基礎作業のひとつであると思う。

II. そこで、まず問題となるのは、P. tib. 1257 に列挙された85部の経論が、どういう目的でリストアップされたのか、ということである。ただアトランダムに収集した、というのではなく、何らかの意図がそこにあったはずである。形式的には、『翻訳名義大集』に類似するが、列挙される順番も経題もそのものにも大

きな相違が認められる。一方、中国で編纂された一切経目録、いわゆる経録は、唐代までに編纂されたもので現在残っているものが15種類あるが、それらに照合してみると、P. tib. 1257 の85部の経論の内77部までが『大唐内典録』巻第8「歴代衆経見入蔵録」（『大正蔵』vol. 55, pp. 302-312）に符合することがわかった。『大唐内典録』巻第8には、801部の経論が収録されていて、その数からいえば1割にも満たないが、『大唐内典録』から抄出した形で、順次、P. tib. 1257 にその漢訳題名を見ることができる。また、P. tib. 1257 の第15番目に『央掘摩経』という漢訳名があるが、それと同じ経名を出すのは『大唐内典録』だけで、それ以外の経録では『央掘摩羅経』あるいは『央崛摩羅経』などとなっている。こうした例は、他にもいくつか見出せるが、この点からも、P. tib. 1257 が『大唐内典録』を手本として成立したものであることが知られるのである。この『大唐内典録』巻第8「歴代衆経見入蔵録」は、編集者である道宣が、西明寺に保存されていた蔵経に基づいて作成した目録である。こうした事実を鑑みてみると、P. tib. 1257 のリストは、敦煌のどこかの寺院に存在したチベット訳経論の目録ではないか、と推測されるのである。その寺院が具体的にどこであるのか、確定はし得ないが、可能性として「大雲寺」をあげることができる。P. tib. 1257 の第3ページ目の余白部分に、「大雲寺張闍和上」の記録があり、続いて『大乘百法明門論開宗義記』という首題と、その冒頭部分が書写されている。この『大乘百法明門論開宗義記』は、西明寺に学んで760年頃敦煌に入った曇曠がその地で著作したものである⁴⁾。「張闍和上」なる人物については不明であるが、「大雲寺」が敦煌に存在した官寺のひとつであることは、すでに知られるところである⁵⁾。そして、敦煌の諸寺がそれぞれの蔵経目録を所有していたことも確認されている⁶⁾。

III. 次に問題となるのは、P. tib. 1257 に載せられている経論のチベット訳が、当時のチベットに実在していたのかどうか、さらに、実在していたとするならば、どのようなチベット訳であったのか、という2点である。

P. tib. 1257 の85部のチベット語題名の内、蔵経本のそれと概ね同一と見なされるものは25部（6, 10, 11, 13, 14, 17, 19, 22, 27, 32, 33, 36, 38, 43, 52, 57, 62, 64, 66, 69, 76, 77, 78, 80, 82）あり、異なるものは36部（1, 2, 4, 5, 9, 12, 15, 16, 20, 21, 25, 26, 30, 34, 35, 37, 39, 40, 41, 42, 44, 45, 46, 47, 48, 51, 53, 54, 57, 68, 70, 72, 73, 75, 81, 84）、また、現行のチベット大蔵経に残っていないものは24部（3, 7, 8, 18, 23, 24, 28, 29, 31, 49, 50, 55, 56, 58, 59, 60, 61, 63, 65, 71, 74, 79, 83, 85）ある。この分類数字は、タイトルの比較だけによるものであるから、確定的なものではないにしても、現行の蔵経本とは異なっ

(136) 敦煌写本——P. tib. 1257——に見られる経論リストについて (赤松)

たチベット訳が数多く含まれていることがわかる。また、P. tib. 1257 の経論のうち、それに相当すると考えられる蔵経本が、版本のコロフォンや従来の研究によって漢訳からの重訳であることが明らかになっているものは6部(9, 14, 16, 20, 36, 62)である。この他、41番目の『阿弥陀経』の漢訳重訳本断片が敦煌写本の中に発見されているし、85番目の『父母恩重経』のチベット訳は現存しないが、デンカルマ目録によって漢訳からの重訳本のあったことが知られる⁷⁾。71番目の『成唯識論』も、玄奘訳からの重訳と見なされる部分訳を有する写本が、敦煌文献に確認された⁸⁾。一方、85部のタイトル内、サンスクリット語のチベット音写を含むものは6部(12, 13, 15, 17, 23, 37)存在する。さらに、38番目の『解深密経』などは、現行のチベット大蔵経所収本の異訳本が、敦煌写本から発見されたが、それは漢訳からの重訳ではなく、サンスクリット本からの翻訳である、といわれる⁹⁾。したがって、P. tib. 1257 にリストされているような経論のチベット訳が、実在していたかどうか、については、今後の敦煌文献の研究を俟った上で結論付けなければならない。そして、そのチベット訳がどのようなものであったか、という問題も同様であるが、漢訳からの重訳と、サンスクリット本からの翻訳のふたつが予想されるのである。

1) M. Lalou, "Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang" II (Paris, 1947) p. 94. "Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang (Fonds Pelliot chinois)" I (Paris, 1970) pp. 34-35.

2) N. Hakamaya, 'The Old and New Tibetan Translations of the Samdhinirmocana-sātra' (『駒大仏教学部研究紀要』42). 木村隆徳「敦煌出土の蔵漢語彙集——Pelliot Tibétain 1257——」(『平川彰博士古稀記念論集・仏教思想の諸問題』).

3) 拙稿「チベット訳阿弥陀経の異本——P. tib. 758 について——」(『印仏研』33-1).

4) 上山大峻「曇曠と敦煌の仏教学」(『東方学報』35) pp. 145-150.

5) 藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」(『東方学報』31) pp. 264-268.

6) 岡部和雄「敦煌蔵経目録」(『講座敦煌7・敦煌と中国仏教』) pp. 307-311.

7) M. Lalou, 'Les Textes bouddhiques au temps du Roi Khri-sron-lde-bcan' ("Journal Asiatique" CCXLI, 1953) p. 325.

8) 袴谷憲昭「敦煌出土チベット語唯識文献」(『講座敦煌6・敦煌胡語文献』) pp. 232-235.

9) 同上, pp. 208-212.

〈キーワード〉 P. tib. 1257, 経録, チベットの仏典翻訳

(龍谷大学大学院修了)